

達成動機づけに関する研究

— Raynor 理論とその実験的検証 —

伊 藤 義 美*

はじめに

達成動機の研究は、いまなお我が国の内外において盛んである。最近我が国でも、宮本ら(1977)、林・山内(1978)そして宮本(1979)において研究の成果が相次いでまとめられている。

ここでは Atkinson の達成動機づけ理論を発展させた Raynor 理論をとり上げて紹介し、その理論の妥当性を検討する。

I Raynor の達成動機づけ理論

1. 達成動機づけ理論の発展

達成動機 (achievement motive もしくは need for achievement) や達成動機づけ (achievement motivation) に関する実験的研究の発展は、大別して次の4段階を経て発展してきているといえる。

第1段階：「達成動機の測度として達成欲求 (n-Ach) の指標を開発する時期」(1947—1953)

この時期は、Murray, H. A. (1938) の欲求 need の分類目録に含まれている達成欲求 (n-Ach) が注目され、自我関与条件、中性的条件及びリラックス条件のもとで書かれた T A T 想像物語の内容が比較検討された。そして達成動機の測度となる達成欲求のスコアリング・マニュアルが作製されたのである。その成果は、McClellandら (1953) にまとめられた。

第II段階：「達成動機の測度としての T A T 測度の妥当性を検討する時期」(1953—1958)

この時期は、達成動機の T A T 測度と喚起条件下での達成行動 (パフォーマンス、パーシステンス、課題再生等) との関係が研究された。パーソナリティの個人差の測度として達成欲求得点の妥当性 (内容妥当性、基準関連妥当性、構成概念妥当性) が吟味された。こうして中

性的条件のもとで得られた達成欲求の強さが、パーソナリティの比較的安定した持続的な個人差を反映すると仮定されてきた。この時期の代表的な研究は、Atkinson (1958) に収録されている。

第III段階：「Atkinson による達成動機づけ理論の提出と達成動機づけ理論の検証の時期」(1958—1966)

排危険行動 (risk taking behavior) の解明を扱うなかで (成功) 達成動機 M_s のほかに失敗回避動機 M_{AF} が導入されることになった。それを受けて Atkinson (1958) は、合力的達成動機づけまたは合力的達成志向傾向 ($T_s + T_{-f}$) を次式のように動機 (M_s と M_{AF})、期待 (P) そして誘因価 (I) の関数であると仮定した。

$$T_s + T_{-f} = (M_s - M_{AF})(P_s)(I_s)$$

だが、Atkinson 理論は、達成行動や排危険行動の研究の多様な結果を十分に説明することができなかったのである。Atkinson 理論の欠陥として主に次の2点を指摘できる。

1) 成功の主観的確率 (P_s) が合力的達成動機づけの唯一の事態的要因である。すなわち I_s と P_s との間に $I_s = 1 - P_s$ という依存的関係があり、しかも P_s の操作的定義が正確でない。

2) 即時的な活動での結果や目標に考察が限定的である。従って長期的な目標の効果や連続的な活動のダイナミクスを扱っていない。

Atkinson and Feather (1966) にはこの時期の代表的な研究が集められている。

第IV段階：「Atkinson の達成動機づけ理論の修正及び発展の時期」(1966—)

Atkinson 理論の欠陥を克服するために幾つかの試みがなされてきている。その試みは大別すると次の4方向に分かれる。

1) 合力的達成動機づけの他に社会的是認の欲求や慣性的傾向 inertial tendencyなどを付加する。

2) 長期的な目標の予期の効果を考慮して Atkinson

* 名古屋大学教育学研究科博士課程
(現 名古屋大学教養部心理学研究室助手)

理論を精巧化する (Raynor, 1969, 1974)。

3) 達成行動のダイナミクス (dynamics of action) の観点から行動の変化を再概念化する (Atkinson & Birch, 1970, 1974)。

4) 帰着理論 (attribution theory) からの接近 (Weiner & Kukla 1970, Weiner, 1972)。

2. Raynor による達成動機づけ理論の精巧化

ここでは, Raynor によってなされた達成動機づけ理論の精巧化の概略を扱う。

Atkinson の達成動機づけ理論を検証した幾つかの研究において, 現在の達成行動が即時的成功にとどまらず遠い将来的成功のための道具と認知される時に, 達成と関係した動機の特徴的な効果が顕著にあらわれることが示唆された (Atkinson, 1966, Isaacson & Raynor, 1966)。しかし Atkinson 理論ではそうした結果の説明や予測ができなかったのである。

Raynor (1969) は, 「Atkinson 理論は即時的に期待される成功や失敗などの結果に考察が限定され, 達成行動が将来の目標や結果に影響するという期待とその価値の効果が理論から欠落している。」と批判して, 達成動機づけ理論の精巧化を試みている。

Raynor 理論は, Atkinson 理論と同様に「動機づけの期待-価値理論 (expectancy-value theory of motivation)」¹⁾に基づくが, 将来の目標や結果の期待が果たす機能的意義を明らかにする。その際に Lewin (1938) の行動の分析が採用されている。Lewin は, 行動を目標への通路における 1 シリーズのステップとみなしている。従って Raynor 理論では次のことが仮定されている。

特定の活動は, 目標への到達通路における即時的な次位ステップ (immediate next step) である。

通路は 1 シリーズのステップから構成され, 各ステップは 1 つの活動 (課題) であるとともに活動の期待された結果を表わす。

通路の 1 シリーズのステップは, 予期される生起順序と結果の種類 (成功か失敗か) を同定する。

1 クラスの誘因内でいかなる活動がどんな結果を生じるか, という個人の認識が通路の長さを決定する。

1) 動機づけの期待-価値理論では次の仮定がされている。

「ある様式で行動する傾向の強さは, ある行動がある結果を生じるという期待の強さと, その結果の価値-い
わば行動の期待される全体的な結果-に依存する。」

こうした一連の仮定に基づいて, 即時的活動での合力的達成動機づけ (あるいは合力的達成志向傾向) の強さ ($T_s + T_{-f}$) は, 次のように決定される。

$$T_s + T_{-f} = (M_s - M_{AF}) \sum_{n=1}^N (P_{1sn} \times I_{sn})$$

M_s : 成功達成動機

M_{AF} : 失敗回避動機

P_{1sn} : 将来の成功の主観的確率

I_{sn} : 将来の成功の誘因価 (ここで, $I_{sn} = 1 - P_{1sn}$)

1, 2, ... n ... N : 通路で予期されるステップの生起順序

1 : 最初のステップ N : 最後のステップ

n : 特定のステップの位置を示す一般項

これは合力的達成動機づけの強さは, 特徴的な合力的動機と, 各ステップの主観的成功確率によって決まる分力的事態の総和によって決定されることを意味している。

Raynor は, 基本的に 2 つの型の通路事態を区別している。ひとつは, future orientation (未来志向) が合力的達成動機づけの強さに影響を与える事態で, 連関通路 contingent path と呼ばれる。この通路は, 即時的成功が将来の成功を得る機会を保証し, 即時的な失敗は将来の失敗を意味する事態と定義される。

2) Raynor 理論では次のような仮定がなされている。

$$T_s = T_{s1} + T_{s2} + \dots + T_{sn} + \dots + T_{sN},$$

$$T_{sn} = M_s \times P_{1sn} \times I_{sn}$$

同様に $T_{-f} = T_{-f1} + T_{-f2} + \dots + T_{-fn} + \dots + T_{-fN}$,

$T_{-fn} = M_{AF} \times P_{1fn} \times I_{fn}$ これは合力的成功達成傾向

(T_s) は, 分力的成功達成傾向 (T_{sn}) の総和であり,

各々の分力的成功達成傾向は動機 (M_s), 主観的確率 (P_{1sn}), 誘因価 (I_{sn}) の積であることを意味する。同様

に合力的失敗回避傾向 (T_{-f}) は, 分力的失敗回避傾向 (T_{-fn}) の総和であり, 分力的失敗回避傾向は動機

(M_{AF}), 主観的確率 (P_{1fn}), 誘因価 (I_{fn}) の積であると仮定される。

$$P_{1sn} = P_{1s1} \times P_{2s2} \times P_{3s3} \times \dots \times P_{nsn}$$

$$I_{sn} = 1 - P_{1sn}, \quad I_{fn} = -(P_{1sn})$$

この仮定に従うと, 即時的活動がある将来の成功を生じるという期待の強さ (P_{1sn}) は, 通路の各ステップにおける主観的成功確率 (P_{nsn}) の積である。ある予期された成功の誘因価 (I_{sn}) は, 将来的な主観的成功確率 (P_{1sn}) の逆一次関係である。また, ある予期された失敗の誘因価 (I_{fn}) は, 将来的な主観的成功確率 (P_{1sn}) の負値である。

いまひとつは、future orientation が合力的達成動機づけの強さに影響を与えない事態で、非連関通路 noncontingent path と呼ばれる。この通路は、先行の成功や失敗が次位の活動の機会と関連がない1シリーズのステップと定義される。従ってこの通路では、即時的な成功や失敗は将来の成功や失敗に影響を与えないとされる。

Raynor 理論は、連関通路での即時的な合力的達成動機づけの強さを予期するために提出されたと言える。Atkinson 理論と Raynor 理論は、当面の活動が将来の目標や結果に影響を与えない場合に等しい。即ち、当面の活動が通路の唯一のステップである場合 ($n = N = 1$, 1ステップ通路) と、当面の成功や失敗が将来の活動の機会に影響を与えない場合 (非連関通路) である。

こうして現在の合力的達成動機づけの強さに及ぼす future orientation 効果は、達成と関係する動機 (M_S と M_{AF}) の個人差、通路の型と効果的な長さ、そして将来の主観的成功確率の総和の関数であると仮定される。

3. Raynor 理論の妥当性の検討のレビュー

Raynor 理論の提出に前後して future orientation 効果に関する研究が幾つかなされている。それらは、いずれも動機と通路の型の関係を扱ったものである。

Isaacson & Raynor (1966) は、知覚された道具性 (PI) と学業成績の関係を調べた。ここで PI が高い場合は連関通路に相当し、低い場合は非連関通路に相当する。 PI が高くなるにつれて抑制不安の低い群は高い成績を得て、抑制不安の高い群は低い成績を得る傾向があった。

Raynor (1970) は2つの研究を行った。研究1では、大学生を用いて学期の初めに受講科目 (心理学) の成績が、将来の職業的成功にとってどの程度有効であり重要であるかを自己評価させた。そして前期の実際の成績との関係を検討した。研究2では履修科目をリスト・アップさせ、将来の職業計画のために各科目の成績がどの程度重要であるかを評定させた。その結果、次の関係を見出した。

(a) $M_S > M_{AF}$ 群は、将来の職業的成功のために受講科目に高い道具性を評定した場合に道具的価値を認めない場合よりも有意に優れた学業成績を得た。

(b) この差は、 $M_S < M_{AF}$ 群に比べて有意に大きかった。

しかし双方の動機群では、知覚された道具性の評定が高い場合に優れた学業成績を得る傾向があった。

Raynor, Atkinson & Brown (1974) は、心理学コースの最終試験に直面した男子大学生の主観的反応を調べ

た。自己記述に表明された動機づけの強さは、試験の成績を将来の目標と関連づけるか否かの関数であった。また達成動機づけが異なる群間での主観的反応の違いは、試験が将来と関連があるとみなす場合に大きかった。

Raynor (1968) においても高校の全体の成績を将来の成功のために重要であるとみなす場合に、動機の強さに関係なく高い成績を得ていることが報告されている。

このように実際の生活事態を用いて検討されたが、 $M_S < M_{AF}$ 群の結果は一貫していなかった。そこで動機の個人差と future orientation の交互作用を検討することが必要となったのである。

Raynor & Rubin (1971) では、異なる型の通路を実験的に導入して future orientation を直接的に操作した。4ステップ連関通路では4つの計算テストを配布して、先行テストの成功・失敗が次のテストを受ける機会を得るかどうかを決めると教示された。一方4ステップ非連関通路においては、先行テストの結果とは無関係に4つのテストを受ける機会が与えられると教示された。そして次のような結果が見い出された。

(a) $M_S > M_{AF}$ 群のパフォーマンスは、4ステップ連関通路条件において有意に優れていた。 $M_S < M_{AF}$ 群のパフォーマンスは4ステップ連関通路条件において有意に劣っていた。

(b) $M_S > M_{AF}$ 群のパフォーマンスは、連関通路条件において $M_S < M_{AF}$ 群のそれよりも有意に優れていたが、非連関通路条件では有意な差はなかった。

(c) 通路の型は、 $M_S \approx M_{AF}$ 群のパフォーマンスに影響を与えなかった。

この実験では Raynor 理論から予想される動機と実験条件の交互作用を見出したのである。

Entin & Raynor (1973) では最短のステップ通路と2種類の課題が導入された。その結果、複雑課題において動機と実験条件の有意な交互作用を見出した。単純課題では有意ではないが、交互作用の傾向があった。こうして2ステップという最短の通路でも動機と通路の型との交互作用が生じることが見い出されたのである。

本邦では必ずしも Raynor 理論を扱ったものではないが、それと関係しているものとして中津ら (1972) の研究がある。小学生 (6年生) を用いたこの実験は、達成動機と要求水準の関係に焦点を合わせているが、喚起条件の検討に future orientation の考えを取り入れている。全試行数の分析において動機と実験条件に主効果を見出し、交互作用効果を認めなかった。ここでは Raynor 理論は支持されなかったのである。

このように実際の生活事態や統制された実験事態の分析を通して Raynor 理論の妥当性を検証する試みがなされてきている。

II Raynor 理論の実験的検討

1. 問題と目的

Raynor ら (1971, 1973) は、動機の個人差と通路の型の交互作用を実験的に検討して Raynor 理論を支持する結果を得た。本部では、中津ら (1972) が Raynor の future orientation の考え方を取り入れているが、Raynor 理論を支持する結果を得なかった。

そこで本研究の目的は、パフォーマンスに及ぼす future orientation の効果を実験的に検討することによって Raynor 理論を検証することにある。本研究では future orientaton として最短の 2 ステップ通路を導入して、通路の型—連関通路と非連関通路—の効果を検討する。

Raynor 理論によると、連関通路のステップ数の増加にともなって即時的課題でのパフォーマンスは、 $M_S > M_{AF}$ 群では促進され、 $M_S < M_{AF}$ 群では抑制される。一方、非連関通路ではステップ数の増加は、 $M_S > M_{AF}$ 群と $M_S < M_{AF}$ 群において即時的課題でのパフォーマンスに影響を与えない。

従って本研究で検討する仮説は、以下のものである。「 $M_S > M_{AF}$ 群は、非連関通路よりも連関通路で優れたパフォーマンスを達成する。一方、 $M_S < M_{AF}$ 群は、非連関通路よりも連関通路で劣ったパフォーマンスを達成するであろう。すなわち、動機と通路の型に有意な交互作用が見いだせるであろう。」

2. 方法

被験者: 中学 2 年生 4 クラス 有効人数 137 名

動機の測定と動機群の選択: 成功達成動機 (M_S) は 4 枚の T A T 図版 [Mc 1, Mc 2, 7 (J 7 M), Mc 4] を用いて、中性的条件でクラス単位で測定した。採点は、A I (Achievement Imagery) = 2, T I (Doubtful Imagery) = 1, U I (Unrelated Imagery) = 0 と重みづけ、4 枚の合計得点を M_S の指標とする。得点化の判定者間の信頼性係数は、 $r = .801 (N = 84)$ であった。失敗回避動機 (M_{AF}) は、T A Q (Test Anxiety Questionnaire) の修正版をクラス単位で実施して測定した。動機群の選択方法としては、2 クラスをこみにした各動機の上位・下位群から特徴的なパターンの被験者を順次に 18 名ずつ選び、それぞれ $M_S > M_{AF}$ 群

と $M_S < M_{AF}$ 群とした。

第 1 ステップの達成課題: 達成課題は、複雑度が異なる 3 種類の計算問題である。

(1) 単純課題 (S 課題) … くり上がりもある 1 桁と 2 桁の加算問題。1 ページあたり 72 問 (6 行 × 12 列) が、3 試行用意された。

(2) 中程度の課題 (M 課題) … くり上がりもある 2 桁の加算問題。1 ページあたり 40 問 (4 行 × 10 列) が、3 試行用意された。

(3) 複雑課題 (C 課題) … 3 ステップの計算問題 (Wendt, 1955)。解答を得るためには次のステップを要する。

上下の二つの式を計算して暗記 <例 A> <例 B>

し、その答を比較する。上段の $7 + 6 \begin{matrix} 13 \\ \hline \end{matrix}$ $8 - 5 \begin{matrix} 3 \\ \hline \end{matrix}$
答が下段の答よりも大きい場合 $9 - 7 \begin{matrix} 2 \\ \hline \end{matrix}$ $5 + 7 \begin{matrix} 12 \\ \hline \end{matrix}$

<例 A> は、上段の答から下段 11 15

の答を減じる。一方、上段の答

が下段の答よりも小さい場合 <例 B> は、両者を加える。

1 ページあたり 28 問 (4 行 × 7 列) が、3 試行用意された。この Wendt の問題は、達成動機づけの研究において利用度が高い (例えば Raynor & Rubin 1971, Entin & Raynor 1973, 中津ら 1972)。

いずれの課題も練習用 1 ページと本検査用 3 ページから成る小冊子にして呈示された。

実験条件と手続き: future orientation は、2 種類の通路 (連関通路と非連関通路) を実験的に操作することによって導入した。

連関通路は 2 ステップで構成され、最初のステップの課題を成功達成した者だけが日を改めて第 2 ステップの課題を受ける資格を獲得し、一方失敗した者は、第 2 ステップの課題に挑む資格を失なうと被験者に認知させることによって操作した。

連関通路条件の教示

お 願 い 名古屋大学教育心理学教室

わたしたちは、新しい知能検査を作るために資料をあつめています。わたしたちが最も知りたいのは、中学生がある問題を行った場合の最高です。すなわち、ある問題が一定の時間内にどれぐらい多く、しかも正確になされるか、その最高数を調べたいのです。

ここで皆さんにやっていただく問題は、I、II、III の 3 種類あります。I は比較的簡単な問題、II は中程度の問題そして III は少し複雑ですができなくはありません。

次回にはもう少し難しいテストを受けてもらいますが、受けてもらう人はこのテストの結果にもとづいて選ばれます。すなわち、このテストの成績が良くて、ある基準に達した人たちが選ばれます。ですから自分の力を出しきるつもりでやっ

表1 3試行での合計正答数の平均と標準偏差

(C.D.)

動機群	非 連 関 通 路				連 関 通 路			
	N	S 課題	M課題	C 課題	N	S 課題	M課題	C 課題
$M_S > M_{AF}$	18	65.67 (19.02)	42.61 (15.49)	25.72 (10.73)	18	78.39 (18.70)	53.78 (16.54)	31.83 (9.12)
$M_S < M_{AF}$	18	60.56 (19.76)	40.94 (17.79)	22.72 (13.25)	18	52.50 (11.70)	34.00 (9.30)	16.30 (6.27)

.....
 てください。

非連関通路は、第1ステップの課題の成績と関係なく第2ステップの課題を受けることができるが、第2ステップの課題を受ける者は偶然に選択されると教示することによって操作された。

非連関通路条件の教示

お 願 い 名古屋大学教育心理学教室

わたしたちは、新しい知能検査を作るために資料をあつめています。わたしたちが最も知りたいのは、中学生がある問題を行った場合の平均です。すなわち、ある問題が一定の時間内にどれぐらい多く、しかも正確になされるか、その平均数を調べたいのです。

ここで皆さんにやっていただく問題は、I、II、IIIの3種類あります。Iは比較的簡単な問題、IIは中程度の問題、そしてIIIは少し複雑ですができなくはありません。

次回にはもう少し難しいテストを受けてもらいますが、受けてもらう人はこのテストの結果にもとづいて選ばれます。その場合、かならずしもこのテストの成績が良い人たちが選ばれるとはかぎりません。(成績が良い人も、中程度の人も、良くない人も選ばれます。)

ですから、自分の力をためすつもりでやってください。

各条件の教示を印刷して配布するとともにゆっくり読みあげた。その際に傍点の部分を強調した。パフォーマンスは、第1ステップの3種類の課題の各々3試行で測られた。なお各試行の前に目標数を設定することが求められた。

双方の実験条件において被験者は、次のことに注意を促された。

(a) 時間制限テストであるから、できるだけ速く正確にやること。1試行あたりの許容時間は1分間であり、各課題とも3試行ずつある。

(b) 休憩時間が各試行の後に1分間あるので、その間に実際の達成数と次の試行の目標数を各欄に記入すること。正答数の欄には記入する必要がない。

実験は、動機測定の日後に、新しい知能検査を作製するために資料収集への協力要請という設定で、正規の

表2 正答数の分散分析表(条件×動機×課題)

	S S	df	M S	F
群 間	51190.600	71		
条件A	111.100	1	111.106	< 1
動機B	7549.401	1	7549.401	12.974***
A×B	3961.501	1	3961.501	6.808*
誤 差	39568.600	68	581.891	
群 内	65333.400	144		
課題C	58052.100	2	29026.050	591.915***
A×C	67.300	2	33.650	< 1
B×C	384.500	2	192.250	3.921*
A×B×C	160.400	2	80.200	1.636
誤 差	6669.101	136	49.038	
全 体	116524.000	215		

* $P < .05$, *** $P < .001$

時間帯を利用してクラス単位で実施された。動機の測定と実験は、筆者が行った。

3. 結果と考察

課題での達成数と正答数には高い相関(S課題: $r = .993$, M課題: $r = .982$, C課題: $r = .949$)があり、結果のパターンも同じであった。従ってパフォーマンスの測度は3試行の合計正答数を用いる。表1には3試行の合計正答数の平均と標準偏差が示してある。合計正答数を3要因(実験条件、動機、課題)で分散分析したのが表2である。表2にみられるように実験条件と動機の交互作用が有意であった($F(1, 68) = 6.81$, $P < .025$)。しかもこの交互作用効果は、3種類の課題においても見いだされたのである(S課題: $F(1, 68) = 5.92$, M課題: $F(1, 68) = 6.08$, C課題: $F(1, 68) = 6.43$, それぞれ $P < .01$)。

こうして $M_S > M_{AF}$ 群は、非連関通路よりも連関通路で有意に優れたパフォーマンスを達成した。一方、 $M_S < M_{AF}$ 群のパフォーマンスは、非連関通路よりも連関通路で劣る傾向があった。しかもこのことは、複雑度が異

なる3種類の課題のすべてにおいて認められた。このようにパフォーマンスの結果のパターンは、通路の型と動機の有意な交互作用を3種類の課題のすべてにおいて見いだしたのである。

本実験では最短のステップ通路を用いて検討したのであるが、Raynor & Rubin (1971) や Entin & Raynor (1973) とは次の点で異なっている。

- (1) 被験者を大学生から中学生に移した。
- (2) 中間的な複雑度の課題を加えて課題を3種類にした。
- (3) ステップ課題を同時に全て提示せずに、第1ステップの課題のみを提示して、第2ステップの課題は他日に行われるとした。
- (4) Raynor らは、成功達成の基準(25問中20問の正答)をはっきり示すと同時に、課題達成が被験者の能力の強力な尺度であると教示してストレス事態を与えている。本実験では成功達成の基準を“ある基準”とあいまいに示し、新しい知能検査を作製するための資料収集への協力要請という設定で実施されているから比較的余分なストレスを与えていないと言える。Raynor らの教示に比べて本実験の教示は、全体的に被験者の内発性に任されるニュアンスが強い。

こうした手続きや教示上の違いにもかかわらず、Raynor 理論から導かれた仮説は、実験的に確証されたのである。Raynor & Rubin (1971), Entin & Raynor (1973) 及び本研究で得られた動機と通路の型の交互作用は、future orientation 以外の要因に依存することはありえないと思われる。Raynor & Rubin (1971) では4ステップ通路が、Entin & Raynor (1973) と本研究では最短の2ステップ通路が用いられる。いずれの研究でも通路の型(連関通路と非連関通路)に関するRaynor 理論は支持されたのである。

4. 本研究の問題点と今後の展開

本実験の場合、各試行の前に目標数を設定させている。この手続きがパフォーマンスに与える効果を検討することが必要である。今後の展開としては、Raynor 理論の検証の視点を通路の型から通路の長さに移すことが考えられる。連関通路では、2ステップ通路よりも4ステップ通路において、すなわちステップ数が増加するほどfuture orientation 効果が促進されることが、Raynor 理論から導きだせるのである。

III まとめ

達成動機を実験的に扱った研究の発展を4段階に跡づけ、各段階をごく簡単に概観した。次に Atkinson の達成動機づけ理論を精巧化した Raynor 理論をスケッチ的に紹介するとともに Raynor 理論を検討した研究をレビューした。Raynor 理論は、人間の達成動機づけにとって重要な心理的将来の効果を Atkinson 理論の公式のなかに導入することを試みたといえる。

通路の型を実験的に扱った本研究において、 $M_S > M_{AF}$ 群のパフォーマンスは非連関通路よりも連関通路において優れ、 $M_S < M_{AF}$ 群のパフォーマンスは非連関通路よりも連関通路において劣った。通路の型と動機の有意な交互作用を、複雑度が異なる3種類の課題のすべてにおいて見だし、Raynor 理論を検証することができた。今後の展開としては、通路の長さに関する Raynor 理論を検討することが考えられる。

Raynor 理論は完成されたものではなく当然幾つかの問題点を含んでいる。しかしながら、Raynor 理論の更なる展開には大きな関心と意欲が呼び起こされるのである。

<謝 辞>

本稿は、昭和49年度に名古屋大学教育学部教育心理学科に提出した卒業論文の一部を加筆したものである。学部、大学院を通じて終始暖かい御指導と激励を賜った丸井文男教授をはじめ教室の諸先生方に心より限りなき謝意を表する次第である。

文 献

- Atkinson, J. W. 1958 Toward experimental analysis of human motivation in terms of motives, expectancies, and incentives. In J. W. Atkinson (Ed.), *Motives in fantasy, action and society*. Princeton: Van Nostrand.
- Atkinson, J. W. (Ed.) 1958 *Motives in fantasy, action and society*. Princeton: Van Nostrand.
- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton: Van Nostrand.
- Atkinson, J. W. and Feather, N. T. (Eds.) 1966 *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.
- Atkinson, J. W. & Birch, D. 1970 *The dynamics of action*. New York: Wiley.
- Atkinson, J. W. & Birch, D. 1974 *The dynamics of a-*

- chievement-oriented activity. In J. W. Atkinson & J. O. Raynor (Eds.), *Motivation and achievement*. Washington D. C.: Winston. 271 – 325.
- Atkinson, J. W. & Raynor, J. O. (Eds.) 1974 *Motivation and Achievement*. Washington D. C.: Winston.
- Entin, E. E. & Raynor, J. O. 1973 Effects of contingent future orientation and achievement motivation on performance in two kinds of task. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6 314 – 320.
- 浜 治世 1969 実験異常心理学 誠信書房
- 林 保編著 1967 達成動機の理論と実際 誠信書房
- 林 保・山内弘継 1978 達成動機の研究 誠信書房
- Heckhausen, H. 1967 *The anatomy of achievement motivation*. New York: Academic Press.
- Heckhausen, H. 1968 Achievement motive research: Current problems and some contributions toward a general theory of motivation. In Arnold, W.J. (Ed.) *Nebraska symposium on motivation*. Vol. 16 Lincoln: University of Nebraska Press 103 – 174.
- Isaacson, R. L. & Raynor J. O. 1966 Achievement-related motivation and perceived instrumentality of grades to future career success. Unpublished paper, University of Michigan.
- 伊藤義美 1973 Achievement Motivation に関する実験的研究 名古屋大学教育学部教育心理学科卒業論文
- Lewin, K. 1938 *Conceptual representation and measurement of psychological forces*. Durham, N. C.: Duke University Press.
- McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A. & Lowell, E. L. 1953 *The achievement motive*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 宮本美沙子・藤原喜悦・下山 剛他 1977 達成動機づけ測定に関する研究の動向 教育心理学年報 第16集 117–133.
- 宮本美沙子編著 1979 達成動機の心理学 金子書房
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in Personality*. New York: Oxford University Press.
- (外林大作訳 パーソナリティ I, II, 誠信書房)
- 中津達雄・倉智佐一・松山安雄 1972 達成動機と要求水準 (I) —実験条件との関連において— 日本教育心理学会第14回総会発表論文集 196–197.
- Raynor, J.O. 1968 Achievement motivation, grades, and instrumentality. Paper presented at the meetings of the American Psychological Association, San Francisco, September.
- Raynor, J. O. 1969 Future orientation and motivation of immediate activity.: An elaboration of the theory of achievement motivation. *Psychological Review*, 76 606 – 610.
- Raynor, J. D. 1970 Relationships between achievement-related motives, future orientation and academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17 36 – 41.
- Raynor, J. O. & Rubin, I. S. 1971 Effects of achievement motivation and future orientation on level of performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 17 36 – 41.
- Raynor, J. O., Atkinson, J. W. & Brown, M. 1974 Subjective aspects of achievement motivation immediately before an examination. In J. W. Atkinson & J. O. Raynor (Eds.), *Motivation and achievement*. Washington D. C.: Winston. 155 – 171.
- Weiner, B. 1972 *Theories of motivation: From mechanism to cognition*. Chicago: Rand McNally College Publishing Company.
- Weiner, B. & Kukula, A. 1970 An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15 1 – 20.
- Wendt, H. W. 1955 Motivation, effort, and performance. In D. C. McClelland (Ed.), *Studies in motivation*. New York: Appleton-Century-Crofts.

(1979年8月17日受理)

A STUDY OF ACHIEVEMENT MOTIVATION

– An experimental examination of Raynor's theory of achievement motivation –

Yoshimi ITOH

We could present four phases in the developmental process of the experimental researches of achievement motive and made a survey of each phase briefly.

We sketched Raynor's theory of achievement motivation, an elaboration of Atkinson's theory of achievement motivation in terms which embrace the psychological future. Then a review of studies on Raynor's (1969) elaboration of theory of achievement motivation was made at some length.

In our experiment we examined the effects of achievement motivation and contingent future orientation (2 steps path) on level of performance. As predicted subjects for whom it was assumed $M_s > M_{AF}$ answered significantly more problems correctly in the contingent than in the noncontingent path, while subjects for whom it was assumed $M_s < M_{AF}$ answered significantly fewer problems in the contingent than in the noncontingent path. The significant interactions between achievement motivations and two types of paths could be found on level of performance, as measured by the number of problems answered correctly in all three kinds of tasks (simple, intermediate and complex tasks).

Thus the validity of Raynor's theory was supported firmly concerning the effects of contingent future orientation on level of performance.

In future an examination of Raynor's theory concerning the length of contingent path will be desired.